シリーズ　若手教師のための授業づくり　Ⅶ

確かな学力を付ける授業づくり

授業終了後、子ども達はどのような表情で、何をつぶやき、何について話しているのでしょうか。

◆Ａさん：「疲れたなあ。」とあくびをしながらつぶやき、友達のところへおしゃべりに行く。
★Ｂさん：「疲れたなあ。」と笑顔でつぶやき、授業の内容について教師や友達に話しかけている。

すべての子どもが「分かってうれしい」「できるようになった」と実感できる授業をめざしましょう

同じ言葉をつぶやいた二人ですが、その真意は大きく異なります。

◆Ａさん：「疲れたなあ。**やっと授業から解放された…。**」
★Ｂさん：「疲れたなあ。**一生懸命考えると疲れるな。でも…楽しかったなあ！**」

授業後も学習内容を考えたり、次時の学習への期待感をふくらませたりしている子どもに共通するのは、「分かった！できた！」という手ごたえです。その喜びが、子どもの主体的な学びを引き出す第一歩になります。

①学習評価の視点を大切にする

評価規準にてらして子どもを見取る

個に応じた支援や次の指導に生かす！

➢「努力を要する状況」の子どもには、その場で、有効な支援をする。
➢「おおむね満足できる状況」「十分満足できる状況」の子どもには、よりよい解決の方法や思考を深める働きかけ、新たな課題を提示する等の手立てを講じる。

「評価規準」って、よく分からないんですけど…。

評価規準とは、設定した目標について、子どもがどのような学習状況を実現すればよいのかを具体的に想定したもので、観点ごとに設定します。つまり、子どもの学習状況を判断する時の拠り所となる“ものさし”と考えれば分かりやすいですね。

すべての子どもに確かな学力を付ける

本当に、子どもに力が付いたのかどうか！

➢子どもが単元（題材）や本時のねらいを達成できたのかどうかを確かめる（評価する）。
→達成できなかった子どもへの手立て、次時の授業の組み立ての修正　等

本時で付けたい力（学習指導要領解説に示された指導事項）は、その時間内に、どの子どもも身に付けることができるよう指導することが大前提です。もしも、「残りは次の時間に…」となってしまった場合には、その原因がどこにあったのかを明らかにする必要があります。

《例》 個人で考える時につまずいた子どもが予想より多く、時間を取りすぎてしまった。
→課題（難易度、興味・関心、作業量等）は学級の子どもの実態にあっていたのか？
→想定されるつまずきと、それに対する具体的な支援の方法を準備していたのか？　等

②自分がめざす授業像を具体的にもつ

➢目の前の子どもによって、教材や指導方法、支援の仕方等は変わる（変える必要がある）。
➢授業を通して、教師も子どもと一緒に成長し、めざす授業像をレベルアップしていく。

いずれは○○先生のように、授業後に、子どもたちが「友達と一緒に考えたから分かった」「みんなが出来るようになってうれしい」と言うような授業ができるようになりたいな。
来年は、他校の先生の授業も積極的に参観して、自分の実践にいかしていこう！

学習評価については、お役立ち情報（４、５、６、７、１０月号に掲載）**『シリーズ　学習評価の充実を図る』**もご参照ください。
※「西部教育局」で検索　http://www.pref.tottori.lg.jp/seibukyoiku/